

ローマ人への手紙14章10-12節 「神の裁きの座」

1A 神の前に立つ日

1B 全ての者に対する裁き

2B 行いに応じた裁き

2A 神への告白

1B 「イエス・キリストが主」

2B 裁かれるための告白

3A キリストの御座

1B 賞を受けるための裁き

2B 隠れた動機

4A 死後のいのち

1B 申し開き

2B 各々への報い

本文

ローマ人への手紙 14 章を開いてください。私たちの聖書通読は、ローマ 13 章まで来ましたが、午後礼拝で、14 章を一節ずつ見ていきます。今朝は、10-12 節に注目します。「¹⁰ **それなのに、あなたはどのようにして、自分の兄弟をさばくのですか。どうして、自分の兄弟を見下すのですか。私たちはみな、神のさばきの座に立つことになるのです。¹¹ 次のように書かれています。「わたしは生きている——主のことば——。すべての膝は、わたしに向かってかがめられ、すべての舌は、神に告白する。」¹² ですから、私たちはそれぞれ自分について、神に申し開きをすることになります。」**

1A 神の前に立つ日

パウロは前回、13 章で私たちが、眠りからさめるべき時刻が、もう来ている、救いが私たちに近づいているという話をしていました。それは主が来られる時のことです。主が来られる時には、信じている者は救われますが、そうでない人々は罪に定められます。神の前に出て、自分のことについて申し開きをしなければならないと、聖書は教えています。

1B 全ての者に対する裁き

私たちは、コロナ禍にいて、感染者も急増しています。その中で、政府の出す方針に多くの批判が起こります。政府だけでなく、人々は誰かが犯した過ちについて、普通の時よりももっと厳しく責めますね。しかし、人を責めるのですが、実はそれぞれ一人一人が、「では、自分はどうだったのだろうか？」と省みないといけません。人の行ったことの一つ一つに、申し開きを人々が行うのですが、実は、自分自身も同じように、いやそれ以上に正しい基準で、裁かれる時が来ます。それが、

ここでパウロが話していることです。「**私たちはみな、神のさばきの座に立つことになるのです。**」と言って、それから「**私たちはそれぞれ自分について、神に申し開きをすることになります。**」と言っています。

今、私たちの時代は、そしり、そして冒瀆する時代に生きています。前回学びました、上の権威は、すべて神から来るので、従うということが大切になります。ところが、自分たち自身が神の下にいるということを知らず、あたかも自分こそが神であるかのように、何でもかんでも責めることができると思っています。ペテロ第二の手紙に、終わりの日に偽教師が現れるとあります。彼らの特徴をペテロは、こう述べています。「Ⅱペテ 2:10-12 特に、汚れた欲望のまま肉に従って歩み、権威を侮る者たちに対して、主はそうされます。この者たちは厚かましく、わがままで、栄光ある人たちののりして恐れませぬ。11 御使いたちは勢いも力も彼らにまさっているのに、主の御前で彼らをそしって訴えたりしませぬ。12 この者たちは、本能に支配されていて、捕らえられ殺されるために生まれてきた、理性のない動物のようです。自分が知りもしないことを悪く言い、動物が滅びるように滅ぼされることになります。」なぜなら、不法の秘密がそのようなものだからです。不法の人、反キリストが、あらゆる権威を度外視して、自らを神とするからです。「黙 13:5-6 この獣には、大言壮語して冒瀆のことは語る口が与えられ、四十二か月の間、活動する権威が与えられた。6 獣は神を冒瀆するために口を開いて、神の御名と神の幕屋、また天に住む者たちを冒瀆した。」

ですから、私たちが今こそ、すべての人を裁く権威を持っておられる方を覚えなさいといけません。どんな人も、その権威から漏れることはないのです。

2B 行いに応じた裁き

聖書は一貫して、人は終わりにそれぞれの行いについて裁かれることを告げています。ソロモンは、非常に知恵ある人でした。けれども、知恵を尽くしても空しいだけであることを知ります。快樂も求めました。事業も行いました。すべてが空しいと言いました。そして、自分が若い時から聞いていたことだけなのだ、と確認しました。こう言っています。「伝 12:13-14 結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。14 神は、善であれ悪であれ、あらゆる隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからである。」

ここで、「すべてのわざ」とありますね。それぞれの人が、すべてのわざについて裁かれます。私たち人間は、どうしても、自分自身をごまかします。自分のしていることについて、たかが知れていると思っています。しかし、そのしていることは、すべてイエスご自身がその身に受けています。すべてのところに、主がおられて、特に私たちが見過ごしてしまうようなこと、小さいこと、小さき者に対してはなのことです。

終わりの日に、イエス様が再臨されます。地上に来られて、この方が王とされます。それで

国々がその前に集められます。ちょうど、羊飼いが羊と山羊をえり分けるように分けられます。そこで、羊として右に分けられた者たちには、こう声をかけられます。「マタ 25:34 さあ、わたしの父に祝福された人たち。世界の基が据えられたときから、あなたがたのために備えられていた御国を受け継ぎなさい。」なぜかという、「25:35-36 あなたがたはわたしが空腹であったときに食べ物を与え、渇いていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、36 わたしが裸のときに服を着せ、病気をしたときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからです。」しかし、本人たちはそんなことをした覚えがありません。そこでイエス様は言われます。「25:45 まことに、おまえたちに言う。おまえたちがこの最も小さい者たちの一人にしなかったのは、わたしにしなかったのだ。」最も小さき者たちだったので、まさか、それが主ご自身に対してしているとは思っていなかったのです。そして山羊として左に分けられた者たちは、その反対で、これらのことを行わなかったことが、まさかイエスに対して行わなかったということを知らなかったのです。

要は、私たちがあまりにも些細と思われることで、気づかないこともすべてのわざが、神の前で明らかにされて裁かれるのだということです。

2A 神への告白

そしてパウロは、イザヤの預言を引用します。「わたしは生きている——主のことば——。すべての膝は、わたしに向かってかがめられ、すべての舌は、神に告白する。」すべての膝は主の前でかがめられます。すべての舌は、「あなたが神です」と告白します。

1B 「イエス・キリストが主」

パウロは、ピリピ人への手紙で、その告白は、イエスが主で、キリストであると告白するものであることを述べています。「ピリ 2:9-11 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。10 それは、イエスの名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが膝をかがめ、11 すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白して、父なる神に栄光を帰するためです。」イエスこそが、神の選ばれた方であり、主と定められた方です。この方によって、神はすべての人を裁かれるのです。

2B 裁かれるための告白

私たちは、「イエスが主」であるという告白をもって救われるということを学びました。「ロマ 10:9 なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせたと思えば、あなたは救われるからです。」ですから、この、「すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白」という言葉を聞くと、すべての人が救われるのか？と思ってしまうかもしれません。いいえ、そうではありません。信じる人にとっては、それは救われる告白ですが、そうでない人たちにとっては、それは裁かれるための告白であります。自分たちが、イエスは主なる方であると認めていなくとも、終わりの日には、その真理がすべての人に明らかにされるのです。その

時に、「あなたは主です」と言っても、それは否が応でも認めなければいけない自明のことであり、その時に認めても、救われるということではないのです。むしろ、それは自分が確かに、イエスにあって裁かれることを認めているようなものです。イエス様も、「主よ、主よ」と言っている者たちが、御国に入れるのではない、と仰っていますね。

ですから、イエスを主であると告白することが、まだこの方を肉眼で見ない時に、それでも信じて告白することがいかに大事かを思います。多くの方が、イエスについて見たこともないし、目に見えないものを信じるなんて、ばかばかしいという反応を示します。しかし、それが、自らの決断、意志で、イエスが主であることを、愛をもって受け入れるということ。神の愛を知って、応答して、信仰を告白するのです。心がともなわず、目に見えるものだけだと言ったところには、愛がありません。信仰や愛がないところには、ただ冷酷な事実しかないのです。信頼関係の中にこそ救いがあり、それがなくなるところには、救いはなく、イエスは主という告白は、全く意味のないものであります。

3A キリストの御座

ところで 10 節の、「**私たちはみな、神のさばきの座に立つことになるのです。**」というところですが、ギリシア語の別の写本では、「キリストのさばきの座」となっています。神ではなく、キリストとなっています。神の裁きの座であれば、それは、黙示録 20 章にある、大きな白い裁きの座のことを指します。子羊のいのちの書に記されていない者たちが、行いの書にしたがって裁かれ、燃える火の池に投げ込まれるというものです。永遠の裁きを受けるための御座です。キリストによる千年間の統治の後に、陰府から出て来て復活して、この裁きを受けます。

1B 賞を受けるための裁き

けれども、キリストの内にある者は、この罪定めから救われたことを私たちは学んできました。「8:1 今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることはありません。」神の怒りからも救われます。「5:9 ですから、今、キリストの血によって義と認められた私たちが、この方によって神の怒りから救われるのは、なおいっそう確かなことです。」前回学んだように、私たちが救われるために、キリストは再び来られるのです。けれども、信じる者たちがキリストの御座の前に立つことが、この箇所だけでなく、他の箇所にも書いてあります。「Ⅱコリ 5:10 私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければならないのです。」

では、どのような裁きなのでしょう？それが分かるのが、同じコリント人への手紙でパウロが説明しています。第一の手紙 4 章です。「4:5 ですから、主が来られるまでは、何についても先走ってさばいてはいけません。主は、間に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごと明らかにされます。そのときに、神からそれぞれの人に称賛が与えられるのです。」称賛が与えられるための裁きだということです。そうです、裁きといっても、裁判所のそれではなく、オリンピックの審判

の裁きです。賞を得るための審判です。

2B 隠れた動機

主イエスは、キリスト者を救うために来られます。その時に栄光の姿に変えられます。その時に、私たちは、信仰の真価が試されます。これまで、人の前では正しいと思われていたことであっても、神の前ではそうではなかったこと。動機は違うところにあったけれども、見た目は良く見えていたことなど。また、同じ兄弟を裁いていて、それは正しいとしていたけれども、実は自分自身も同じことを来っていたことなど。それらは、火で焼かれます。コリント第一 3 章を開いてください。「3:12-15 だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、藁で家を建てると、13 それぞれの働きは明らかになります。「その日」がそれを明るみに出すのです。その日は火とともに現れ、この火が、それぞれの働きがどのようなものかを試すからです。それぞれの働きは明らかになります。「その日」がそれを明るみに出すのです。その日は火とともに現れ、この火が、それぞれの働きがどのようなものかを試すからです。14 だれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。15 だれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、その人自身は火の中をくぐるようにして助かります。」この裁きの火は、精錬するための裁きであり、苦しみを与えるための火ではありません。自分の信仰が、木や草や藁でできているのであれば、燃えつくされますが、金や銀や宝石であれば、精錬されますが、その純化されたものは残るのです。

私たちは、今現在も、そういった意味で、裁きを受けていると言えます。私たちは日々、神の前に出て、自分を吟味します。それによって、正しい方イエス様が現れた時にも、同じようにその姿で出て行けるようにしているのです。「I コリ 11:31 しかし、もし私たちが自分をわきまえるなら、さばかれることはありません。」そして試練の時に、私たちの信仰の真価が試されます。平時には、信仰的なことはいくらでも語れます。けれども試練の時に、はたして自分は信じているのかが明らかになります。その上で、主が来られた時に称賛を受けるのです。「I ペテ 1:6-7 そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいますが、今しばらくの間、様々な試練の中で悲しまなければならぬのですが、7 試練で試されたあなたがたの信仰は、火で精錬されてもなお朽ちていく金よりも高価であり、イエス・キリストが現れるとき、称賛と栄光と誉れをもたらします。」

このように、主がさばかれるのです。私たちが表面的なところで兄弟たちを判断しているのが、どれほど主のお考えとかけ離れたものであることが分かるでしょう。主こそが、私たちの心の深い部分を見通しておられるのです。そして、その心の動機にしたがって、主は正しく報いてくださいます。主にさばきをお任せしましょう。

4A 死後のいのち

最後に、これら神の裁き、またキリストの裁きを知る時に、「死んだらすべて終わり」という考えがいかに浅はかであるかを知ります。しかし、日本人の死生観には「死んだら終わり」というものがあ

ります。永遠の命について話すと、多くの人は、「今の人生だけで十分だ」と言います。この人生のことだけを考えています。そして死後の命については、今の人生の延長のように考えてしまっているのです。しかし、かの世は、今の世で最も貴重な、高価なダイヤモンドが、道端の石ころのようなところなのだ、ということが想像できていません。今の世があり、そして来るべきかの世があります。

1B 申し開き

パウロは言いました、「¹² ですから、私たちはそれぞれ自分について、神に申し開きをすることになります。」今、私たちのしている一つ一つが、将来は、裸にされる時があるのだということです。「ヘブ 4:13 神の御前にあらわでない被造物はありません。神の目にはすべてが裸であり、さらけ出されています。この神に対して、私たちは申し開きをするのです。」

2B 各々への報い

そして、パウロの言ったことで大事なのは、「それぞれ自分について」ということです。それぞれが、神の前に出ます。神の前に出る時に、他の人がしていることは関係がありません。自分が、それぞれの状況の中で、どのように応答したのか、そのことが問題にされます。連帯責任というものはないし、また、環境のせいにして、他人のせいにすることはできないのです。また、他の人と比べることがいかに愚かが分かるでしょう。「Ⅱコリ 10:12 私たちは、自分自身を推薦している人たちの中のだれかと、自分を同列に置いたり比較したりしようとは思いません。彼らは自分たちの間で自分自身を量ったり、互いを比較し合ったりしていますが、愚かなことです。」

こうして、私たちは報いを受けます。イエス様が再び来られることを思って、慎み深くしていきましょう。黙示録の最後における、イエス様の言葉を引用します。「22:12-13 「見よ、わたしはすぐに来る。それぞれの行いに応じて報いるために、わたしは報いを携えて来る。13 わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」